



三矢直生氏

No.330 平成28年11月15日発行  
発行・編集 連合駿台会

発行人 広報委員長・齋藤柳光  
編集人 事務局・矢嶋まゆ子  
〒101-0052 千代田区神田小川町三十二  
明治大学「紫紺館」内  
電話 (〇三三) 三二九六一四七四七  
印刷 有限会社 美創

## 連合駿台会 九月例会

## 「夢がかなう法則」

女優・歌手 三矢直生氏

連合駿台会平成二十八年九月の例会を、九月二十一日(水)十八時より、明治大学「紫紺館」三階会議室で、三矢直生氏をゲストスピーカーとして開催しました。

開会に先立ち、田村駿会長から次のような挨拶がありました(挨拶主旨)。

九月というと従来は昼例会だったが、現役世代のご要望もあり、今年から夜例会とさせていただきます。今回は百十名を超える会員の方々にお集まりいただき、御礼申し上げます。

七月二十九日、グローバルフロントにおいて交換留学生の春学期修了式があった。私も出席させていただいたが、当会の大きな事業である大学支援という立場から、修了生百四十五名へ明治大学でのよき思い出として、記

念品を贈呈した。後日、大学の事務局からとても好評で、皆さん喜んでいただいているという連絡もあったので、ここでご報告させていただきます。

この二カ月の話題といえば、政治面では参院選挙が行われ、初の女性都知事・小池百合子氏が誕生し、スポーツ面では、二十五年前に赤ヘル軍団・広島カープが優勝した。しかし何ととっても、あの感動のリオ・オリンピックピックだろう。四十一個のメダルを獲得、柔道、体操、レスリング、バトミントン、卓球、競泳、陸上……、あらゆる分野で日本人が活躍したので、その都度ご覧になり、感動と感激、そして涙を流されたのではないかと思います。

中でも明治大学OBの水谷隼選手と四年生の丹羽孝希選手が出場した男子卓球では、個人初の銅メダル、団体でも初の銀メダルを獲得。水谷選手の個人三位決定戦におけるベラルーシのベテラン選手との四十八回に渡るラリーの応酬と時速百五十キロのスマッシュ、団体戦では十二回も戦って一度も勝ったことのない中国の選手相手に、最終第五ゲームでマッチポイントを握られてから驚異的な集中力で得点を重ねて、3-2で競り勝った。勝利に対する執念、打倒中国！という執念には、息詰まるような興奮と感動を覚えた。この勢いで、四年後の東京オリンピックには大いに期待をしたいと思う。

当日の講演の要旨は以下の通りです。

\*

本日のテーマ「夢がかなう法則」というのは、私が十二年前に宝塚受験と退団、その後の藝大受験のことを書いた著書のタイトルでもあり、この本では、当時、私の周りにいらした方からいただいたお言葉や起きたことなどを綴っている。今日はそれに基づいてお話しさせていただきたいと思う。

昭和三十八年に四二五〇号というビッグな赤ちゃんとして生まれた私は、姉がいたせいか、甘えん坊でやんちゃな子だった。ただ歌うことや踊ることは大好きで、特に母が大の宝塚ファンだったので、初めて宝塚の舞台を観たのは四歳だった。小学校四年生の時、父の転勤で関西へ行ったところ、周囲に宝塚出身の方が多く、それに影響されたのか、中学に入ると本気で宝塚に入りたいと思い始め、学校帰りに週三回の三時間のバレエのレッスン、歌もかなり遠方まで習いに行っていた。どちらの先生もとても厳しかったが愛情豊かな方で、私自身も本当にかなえない夢があったので、少しも辛くはなかった。

宝塚音楽学校の受験は二十七倍という狭き門で、同期には黒木瞳や真矢みき、涼風真世たちがいた。当時、宝塚の入試は一次と二次が歌と踊りと面接、三次は面接だったが、今は制度が変わり、一次試験は、宝塚に相応

しい容姿で判定されるのだそうだ。宝塚の合格発表はテレビなどでも報道されるが、貼り出された巻物のような紙に自分の名前があった時は涙が出て、一緒のバレエスクールに通っていた友人と抱き合って喜んだことを昨日のこのように覚えている。

予科時代は想像を超える厳しさで、何せ規則が一万個くらいある。阪急電鉄グループの末端に位置するのが宝塚音楽学校なので、陸橋の上を走る電車にも挨拶しなくてはならないし、それを怠ったところを本科生に見られると直ちにお詫びに行かなくてはならない。髪型も厳しく一本も髪の毛も下ろしてはいけないので、通称「予科ピン」できっちり押さえ、また中指は常に制服の縫い目に乗せていなくてはならない。寮のお風呂でも蛇口の向きから桶の置き方まで、厳しく決められている。掃除も一々くらのタイルの間を綿棒できれいにするので、朝五時四十分くらいから三時間ほどかけてピカピカにした。同期とはいっても私のように中学を卒業して入った者と高卒者がいる。しかし私が主席で入ってしまったため、委員になって同期をまとめなくてはならない。しかもその同期生が自分よりも年上だったりするので、本科生にはひたすら謝り続けていた印象が残っている。しかし、厳しい本科生がいたので仮想敵として同期が団結できたのかもしれないし、舞台

では命に係わる事故も起こり得るので、無駄とも思えるような規則があることも、団体生活の中では大切なのかなと思う。

そして花の本科生時代を経て、いよいよ初舞台となる。今度は宝塚歌劇団の研究課一年生になるので、また立場が弱くなり、それこそ先輩に叱られた失敗は数知れない(笑)。研究課二年になると、本公演と同じキャストをやらせてもらえる新人公演というものがあって、その頃になると御最良の方たちもできてきて、終演後にファンの方が待っていて下さったりするのだが、どう接していいかわからなかった。三年生になると、ようやく自分の道が見えて来るのだが、その頃ちょうどニューヨークにレッスンに行つてこの街に魅了され、いつかここでライブなどができたらいいなあ……、というのが心の隅にあった。ニューヨークでは自分の夢は全部かなうように思えたのだが、帰国すると歌劇団は組織なので、自分のやりたいことができない、認めてもらえないという思いだけが強くなった時期だった。私はいたずらに成績はよかったが、学生時代と違い成績だけで評価される世界ではないということも思い知らされた。その落ち込んでいた時期に応援して下さった方の中に神戸の六麓荘に住む堀江さんという奥様がいらして、そのお宅が「如是庵」と言っていた。これは、どんなときにも好きなように生

きる〴〵という意味らしく、そこのご主人様から、どんな人でも過去に生きる人は老人で、未来のことを見つめて生きていきなさい、と言われたことは、今でも心に残っている。

昭和五十六年に六十七期生として宝塚歌劇団に入団し、十年間在籍していたが、五年目くらいに一度辞めようと思つて、退団届を出したことがあった。ところが時を同じくして極度の鉄欠乏性貧血で倒れ、稽古にも出られなくなる、自分はまだまだ舞台上に立ちたいのに、こんな安易に退団届を出してはいけないのでは？ と思いを新たにす。退団届撤回などをしたのは、伝説のスター天津乙女さん

に次いで二人目だったのだそうである。そして『ベルサイユのばら』公演で念願のジェロデル(主人公オスカルの婚約者である二枚目)役を最後に退団する。この時には宝塚がイヤだから辞めるのではなく、お腹一杯食べた、本当に好きなことをやり遂げた……、という思いで一杯だった。当時は一学年四十人・四組だったが、十年も在籍すると残っていたのは三人だけで、そのひとり真矢みきが、退団公演の時に化粧前を全部白い花で飾ってくれたことを覚えている。

退団の興奮から覚めてみると、幼稚園からずつとどこかに所属していた自分が、普通の人に帰ったことが怖くなった。それまで世間離れしていた生活を送っていたので、急に

することがなくなつて、目標を失う恐怖に陥ってしまったのだが、何か仕事をしようと思つても、中卒ではどうしようもないことも、改めて痛感させられた。何とかNHKのオーディションに通つて、音楽バラエティ番組で森公美子さん、中島啓江さん(故人)、川平慈英さんたちと一緒させていだいたが、先輩の鳳蘭さんから「宝塚はそう捨てたものじゃないのよ、毎日これだけ公演している劇団は多分世界で宝塚だけなのだから、臆せず経験値で負けないと思いなさい」と言われたのには本当に勇気づけられた。

その後、ミュージカル『アニー』にも出演させていただいたのだが、共演者の一人に音大出身の方がいて、宝塚を批判的に言われたことで生来の負けん気に火がついて、この人より難しいところに挑戦しようと思つた。これが人生の中でバネになったわけで、悔しい思いというのは、後から思うとすごい財産なのだと実感している。この時に東京藝大の平野忠彦教授と共演させていただく機会に恵まれ、藝大受験を思いつくだが、高校を卒業していなかったので、まずその秋に大検を受験して何とかパスした。そして毎日国会図書館に一番に並ぶと合格するというリンクスを手で作つて願をかけ、猛勉強した。そして合格発表の日、宝塚とは違い藝大はA4の紙にちよろちよろつとしか書かれていな

い。同期は六十人でアルトは十二人、そこに世界中から受験するのだから、入れたのは奇跡のようなものだった。本当に何が原動力になるのかわからない。三十二歳で東京藝術大学音楽部声楽科に入学することができたのだが、これが入つたら入つたで、また大変、語学は難しいし、仕事をしながらなんてとんでもなかった。しかも宝塚は公演をするための稽古で、必ず観てもらえるという目標があったが、稽古のための稽古というのは生まれて初めてで、いくらやっても発表の場がないことが、最大のストレスにもなった。

大学では理論的なテクニクやメソッドを学び、宝塚時代に培った「心を伝える歌」に磨きをかけることができたのはよかったです。大変ではあったが、ただ、もう一度人生を楽しんでいいのかな……、と思えたのも幸せだった。在学中から小林公平先生(小林一三氏の孫)のお招きで、歌劇団の生徒たちに歌を教える仕事をしているが、四百人からいるメンバーの中でスターになる子は、何かが違ふと感ずる。まず圧倒的に素直であり、そしてモチベーションを保ち、絶対にあきらめない子たちだと感ずる。私は歌うことが一番好きで、ミュージカルで役を演じるときには、その人物の人となりや、生きてきた時代背景を調べ上げ、せりふや歌詞の一つ一つの言葉を自分に落とし込んで舞台に立つ。宝塚の生

徒たちには、お客さまに楽しくなって帰っていただくことが私たちのミッション。頭と喉ではなく心で伝えようね」と指導している。私がこれまで培ってきたものを、ひたむきな若い生徒たちに伝えられるのは幸せだと思っている。

クラシックを始めたことでフィールドが

【講師略歴】

三矢直生（みつや・なお）

宝塚音楽学校首席入学。歌える男役スターとして活躍。「ベルサイユのばら」ジェローデル役で退団。退団後は数々の舞台・NHKテレビ（レギュラー出演）等テレビで活躍。

一九九六年、大検を経て、東京芸術大学音楽学部音楽科入学。一度で合格、大検を経ての、その快挙は、宝塚歌劇団史上初めてということで、全国五大新聞はもとより、各メディアで話題となる。

二〇〇〇年、卒業後はオペラ・オペレッタにまで活躍の場を広げ、日本各地で活躍されている。

二〇一六年、アメリカニューヨークでライブを。大江千里氏ピアノ、コシノヒロコ氏衣装にてライブコンサート開催。

著書：『夢かかなう法則』（小学館）。CD：『グロリーオブラブ』。

二〇〇三年、母となり「こっこクラブ」（ベネッセ）にエッセイを連載。

現在宝塚歌劇団音楽講師、聖徳大学大学院、音楽講師も勤める。

広がったし、何より大きな財産は友人が増えたことだ。そしてこの夏、最初にもお話しした大きな夢、ニューヨークのグリニッジ・ヴィレッジのデュープレックスという老舗のライブハウスで演奏会をするという夢もかなったので、最後に私のモットーとしている言葉をご紹介させて講演を終わらせていただきます。

「何かを始めるのに年なんか関係ない。自分の力で自分のやりたいことをやる」

「どんなに若い人でも、過去に生きる人は老人。未来に生きる人は青年」

◆広報委員会からのご案内（理事会議事録）

日時：平成二十八年九月二十一日（水）十七時  
場所：明治大学「紫紺館」（二F会議室）

○新入会員承認の件

高澤組織・会員増強委員長から、下記のような報告・説明があった。

先日は持ち回りで五名の方（戸田建設(株)建築本部執行役員・深代尚夫氏、(株)近鉄エクスプレス代表取締役社長・鳥居伸年氏、森ビル(株)取締役副社長執行役員・北林幹生氏、昭和産業(株)代表取締役会長・岡田茂氏、社会保険労務士法人大槻経営労務管理事務所名誉会長・大槻哲也氏）の承認をいただきお礼を申し上げます。本日もまた五名の方が推薦されて

いるが、うち古座立郎氏（セントラル短資(株)・常勤監査役）、三浦栄治氏（野村アセットマネジメント(株)・常務執行役員）、長谷川俊也氏（野村證券(株)・執行役員）の三名は柳谷理事長からのご紹介で、委員会としてフォローさせていただいた。ほか「新社長入会促進活動」でのアプローチの結果、上野雅史氏（株）荘内銀行・代表取締役頭取）、池田純久氏（株）京王プラザホテル札幌・代表取締役社長）も入会に同意いただき、委員会では全員を承認した。

これに関して全員異議なく承認された。

○各委員長より報告事項

各委員会から、順次報告があった  
〈総務・事業委員会 河村委員長〉

今後の例会以外の行事予定についてご説明する。十月度は五日にオープンゴルフコンペ（於：千葉バーディクラブ）、二十七日には正副会長会（於：日本工業倶楽部）を開催、十一月度は、今年度の親睦会として六日に歌舞伎観劇（於：国立劇場・「仮名手本忠臣蔵」と会食（於：半蔵門グランドアーク）を開催、九日には第七回目のビジネス勉強会（講師：野村不動産ホールディングス(株)代表取締役社長・杏掛英二氏）が決定している。今後の運営方法としては、従来、例会は十八時からだが、これだと講演が始まるのが十八時二十分

くらいになり、懇親会の開始が十九時半近くなってしまうこともあるので、十一月から例会の開始を早めて、講演を十八時、懇親会を十九時からスタートできるようなスケジュールで例会の運営を進めていきたいと思っ

ています。また懇親会の内容についても、もう少し充実させたものにと考えています。

〈組織・会員増強委員会 高澤委員長〉

前回の理事会の時に、会員の入会資格要件の厳格化についてのご意見が出たが、現在の要件については、「連合駿台会規約」を補完する「連合駿台会内規」の入会条件の中で、別途用意した「新会員推薦規定」に、①上場・公開企業の役員、及びそれに準ずる人、②資本金三千万円以上のオーナー経営者、③弁護士など資格のある人の中で、その組織の役員、及びそれに準ずる人、④評論家、芸術家などの著名人、又は会員として迎えるに相

応しいと思われる人、とあり、注意事項として「上記はあくまでも目安であり、絶対条件ではありません。また地方自治体の議員等は原則として、入会要件を満たさないものとして

「ガイドラインとして守るべきものの、入会推薦にあたっては委員が面談も行い、当会に相応しいという結論を委員会が出した上で、理事会に諮っている。過去を遡っても、資本金三千万円以下でも、当時の委員会の判断基準

に基づいて入会されているケースもあり、それによって当会が大きく逸脱したとは思われない。委員会としては従来の踏襲に従いながら理事会に諮りたいと考え、内規の改正などを行うのではなく、運用の中で進めていきたいと思うのでご協力をお願いしたい。

〈広報委員会 齋藤委員長〉

本日、懸案であったパンフレットのリニューアル版を同封してある。四年前に比べ活動も増補されているので、今回は前回の倍の千部作成したので、会の増強活動や新入会員の勧誘のために利用していただきたい。またこれに基づいて、ホームページもコンテンツを集めて、近々にアップデートしたいと思っ

〈大学支援委員会 浅井委員長〉

各事業の進捗状況についてご報告したい。①学術賞・学術奨励賞に関しては、従来の課題であった若手研究者・女性研究者・外国人研究者・明治大学出身の研究者の受賞については一定成果を見ている。今年度の課題は応募研究論文数の増大であり、そのための露出度アップ（教授会でのアナウンス・研究室へのパンフレットの投函の徹底）を図ることとした。七月下旬より募集を開始、十一月の選考委員会にはオプザーバーで参加を予定している ②秋期寄付講座講は(株)チュチュア

卒・当会会員）を講師に迎え、十月十八日に開催、講演のタイトルは「革新的進歩の世界観」③フューチャースキル養成講座（商学部・経営学部）は、厳しい内容にも拘わらず、生徒の脱落なしで大好評のうちに終了した。人気講座であり、成功の背景は連合駿台会の支援に基づき、企業からの熱意のある指導の賜物であったとして、大学からも謝意が示された。受講抽選に外れた学生より講座数増設の要請が多く、来年度増設を検討したいとの意向もあるが、希望者を抽選で選んでいるためレベルのバラつきが課題となった ④留学生支援では、「交換留学生」春学期修了者百四十五名の修了式が七月二十九日に行われ、田村会長も来賓として出席された。式典では田村会長が英語で祝辞を述べられ、留学生に記念品（ロゴ入りペットボトル・トートバッグセット）を贈呈、来年一月予定の秋学期修了者分と合わせて二百十名分を手配した ⑤ホームカミングデー・お茶の水JAZZ祭・シェイクスピアプロジェクト協賛については、従来通りの支援を行う予定である。

〈財務委員会 坂田委員長〉

年会費の未納入者に対する再請求を、従前は十月初めに行っていたが、財政基盤を確実にするために九月初旬に発送し、請求内容も「九月末日まで」と明記した。直近の状況では五十一名（うち二年以上の未納者は十名）



●国家公務員総合職試験

最終合格者へ報奨金を授与

国家試験指導センター行政研究所(所長・西川伸一)政治経済学部教授)は十月二十六日、二〇一六年度国家公務員総合職試験に最終合格した同研究所の所属学生十二人への報奨金授与式を、駿河台キャンパス・岸本辰雄ホールで執り行った。

●就職キャリア支援

企業と大学の就職懇談会

就職キャリア支援センターは十月二十六日、柳谷孝理事長、土屋恵一郎学長はじめ大学役員・役職者、各学部・大学院の就職担当教員が、明大生の採用実績が一定以上ある企業の採用担当者との情報交換を行う「企業と大学の就職懇談会」を駿河台キャンパスアカデミーコモンで開催した。

この懇談会は、明治大学側から教育内容や就職支援の現状について、企業側からは採用状況や採用意欲などの情報を交換することで連携を深め、就職と採用、双方の活動に役立てようと毎年大学が開催しているもの。

●政経・市川ゼミ

観光庁長官賞を含む三部門で受賞

大学生観光まちづくりコンテスト運営協議会(事務局・株式会社JTB総合研究所、

株式会社三菱総合研究所)が主催し、観光庁、文部科学省等が後援する「大学生観光まちづくりコンテスト二〇一六」に、明治大学から政治経済学部の市川宏雄ゼミ、経営学部の歌代豊ゼミの計四チームが出場。現地のフィールド調査・分析に基づく、観光まちづくりプランを全国の大学生と競い、市川ゼミが観光庁長官賞(最優秀賞)とクリエイティブ賞をダブル受賞するなど、明大勢が四部門で受賞を果たした。

●OB市長

▽新潟県長岡市長(十月十六日投開票)

磯田達伸氏(無所属①)、一九七六年政経学部卒・六十五歳

●OB町長

▽愛媛県伊方町長(十月二日投開票)

高門清彦氏(無所属①)、一九八一年農学部卒・五十八歳

▽愛媛県久万高原町長(八月二十八日投開票)

河野忠康氏(無所属①)、一九七三年文学部卒・六十五歳

●校友・北野武氏

仏政府の「レジオン・ドヌール勳章」受章

本学校友で映画監督・タレントの北野武氏(二〇〇四年特別卒業認定)がこのたび、

明治大学は二〇一四年十一月、同氏の社会的実績や世界平和に向けた人道的課題解決への多大なる貢献を高く評価し、名誉博士学位を贈呈していた。

●興奮と感動を再び

明大アスリートリオ五輪報告会

明治大学は、この夏のリオデジャネイロオリンピックに出場した明大アスリートの活躍をたたえ、大会を振り返る「リオデジャネイロオリンピック報告会」を十月二十日、駿河台キャンパス・リバティホールで開催。現役明大生として出場した、卓球の丹羽孝希選手(政経学部4年)、ボート競技軽量級女子ダブルスカルの富田千愛選手(政経研究科博士前期課程1年)、サッカーの室屋成選手(政経学部4年)のうち丹羽選手、富田選手が登壇し、五輪での戦いを報告した。

●国際連携本部

グローバル人材育成シンポジウム

国際連携本部は十月十二日、グローバル人材育成シンポジウム「企業が求める人材」を、NPO留学協会と開催。会場となった駿河台キャンパス・グローバルホールには、留学に関心を持つ大学生・高校生など約百三十人が来場した。

フランス政府の「レジオン・ドヌール勳章」を受章した。「レジオン・ドヌール勳章」は一八〇二年にナポレオン・ボナパルトが創設したもので、文化・科学・産業・商業・創作活動などの分野での卓越した功績を表彰することを目的としたもの。

北野氏の功績は、「大胆で独創的な創造性より生み出された作品が、芸術ジャンルの限界をやすやすと乗り越え、演劇、テレビ、映画、文学などの約束事を変革して、現代のアートシーンに影響を与えてきた」と評価され、レジオン・ドヌール勳章の四等に該当する「オフィシエ」が授与された。

●本学名誉博士アントニオ・グテーレス氏 次期国連事務総長へ 国連総会は十月十三日、明治大学名誉博士(第三十一号)で前国連難民高等弁務官のアントニオ・グテーレス氏を、次期国連事務総長に任命した。任期は二〇一七年一月一日から五年間となる。

グテーレス氏は、一九四九年ポルトガル・リスボン生まれの六十七歳で、ポルトガル首相(一九九五(二〇〇二年)や国連難民高等弁務官(二〇〇五(二〇一五年)などを歴任。難民対象の推薦入試の実施や「難民映画祭」への参加などUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)の取り組みに積極的に関わる

●お茶の水JAZZ祭 第十回記念大会大盛況

十月八日・九日、駿河台キャンパス・アカデミーホールを会場に第十回記念大会としてお茶の水JAZZ祭が二日間にわたって開催された。冒頭、総合プロデューサー、総合司会を務める校友の宇崎竜童氏と阿木燿子氏から、「母校明治大学及び千代田区地域団体の皆様のご後援、関係皆様によるご協賛など多数のご支援により、十周年を迎えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです」と謝辞が述べられた。

●鳥取県・平井知事が訪問

さらなる連携強化へ意見交換 創立者の一人、岸本辰雄の出身地である鳥取県の平井伸治知事が十月十一日、駿河台キャンパスを訪れ、土屋恵一郎学長、柳谷孝理事長らと初めて懇談。十一月に開催する全国校友鳥取大会への協力など、さらなる連携強化に向けて意見交換した。

懇談には、土屋学長、柳谷理事長はじめ、竹本田持副学長(社会連携担当、農学部教授)、鈴木利大学務担当常勤理事が出席。土屋学長が「鳥取と明大は一心同体、強い絆で

●マンドリン倶楽部

ローマ・ナポリで演奏会

明治大学マンドリン倶楽部は、イタリアでの海外公演を実施し、九月十五日にローマ、十七日にナポリで演奏会を開催した。こ

●日本留学アワーズ二〇一六

「留学生に勧めたい進学先」五年連続入賞

全国の日本語学校の教職員が選ぶ日本留学アワーズ(留学生に勧めたい進学先)の「大学文系部門(東日本)」で、明治大学が五年連続で入賞した。日本留学アワーズは、日本留学を志す多くの外国人留学生の環境整備に貢献することを目的に、二〇一二年に創設。今年はその日本語学校約三百三十校から五百四十八票が集まり、専門学校部門▽私立大学文系部門▽私立大学理工系部門▽国公立大学部門▽大学院部門をそれぞれ東西に分けた計十部門から、五十五校が上位校に選出された。

このシンポジウムは、文部科学省が官民協働で進める留学促進キャンペーン「トビタテ！留学JAPAN」のプロジェクトリーダーである船橋力氏や、企業の人事担当者によるトークセッションを通じて、世界で活躍できる人材の育成と海外留学が果たす役割を探るといふもの。

●マンダリン倶楽部

ローマ・ナポリで演奏会

明治大学マンドリン倶楽部は、イタリアでの海外公演を実施し、九月十五日にローマ、十七日にナポリで演奏会を開催した。こ

結ばれている」とあいさつすると、平井知事は、日頃の取り組みに感謝を述べるとともに「岸本先生は県民の誇り。校友大会では、鳥取で大きい明大のスピリットを共有していたきたい」と歓迎の意を示した。

明治大学は、二〇〇九年に「明治大学・鳥取大学・鳥取県との連携協力に関する協定書」を締結して以降、社会人の学び直しプログラム「とっとりグランマ倶楽部」や各種連携講座の実施、学生派遣プロジェクトといった連携事業を実施。最近では、新たな資源として注目されるメタンハイドレートの調査・研究拠点を鳥取市に設置するなど、学術交流も活発に行われている。

●うれしい「再会」、新しい「つながり」  
第十九回ホームカミングデー

年に一度、校友（卒業生）を母校に迎える「第十九回ホームカミングデー」が十月二十三日、駿河台キャンパスで開催された。校友やその家族ら約四千三百人が集い、恩師や懐かしい旧友との再会、学生との交流など、晴れやかな秋の一日を満喫した。

●埼玉りそな銀行・池田社長講演  
「改革のマネジメント」

リバティアカデミーは明治大学校友会寄付講座「改革のマネジメント」を十月十三日、

駿河台キャンパス・グローバルホールで開催した。埼玉りそな銀行社長の池田一義氏（一九八一年商卒・当会会員）が講演を行った。池田社長は講演の前半、「失敗のマネジメント」と題し、とりわけ「りそなショック」への反省、失敗の本質が何だったのかを自らの歩んできた経歴と共に振り返った。後半は、反省を糧にして進めた「りそな改革」がどのようなものであったかを紹介し、社員心の改革や、当たり前を疑う姿勢、かっこの重要性、改革の継続性やりそなイズムの継承などを熱弁し、会場には傾きながら聞き入る人が多く見られた。

●連合駿台会寄付講座  
チユチュアンナ・上田社長が講演

リバティアカデミーは十月十八日、連合駿台会寄付講座「革新的進歩の世界観」を駿河台キャンパス・グローバルホールで開催した。靴下やインナー・ウェアを国内外で展開する(株)チユチュアンナ代表取締役の上田利昭氏（一九六八年法卒・当会会員）を講師に迎え、果敢にチャレンジを続ける同氏のビジネスマインドや今後のビジョンが明かされた。大学卒業後、関西地区でスーパーを展開していた(株)ニチイ（現在のイオングループ）へ入社。「松下幸之助を超える経営者になる」とビジネスの世界に飛び込んだにも関わら

ず、最初の配属先が靴下売り場で「半年間、ひたすら靴下の陳列棚を整理していた」と不本意だった日々を紹介。「上司から『まず、一年頑張れ』の一言。でも結局、今でも靴下の仕事をしている」と笑顔で振り返った。

●リバティアカデミー

「大塚初重、九十歳―掘った考えた生きた―」明治大学の生涯学習機関リバティアカデミーは九月二十四日、考古学の大家である大塚初重名誉教授を招き、秋期オープン講座「大塚初重、九十歳―掘った考えた生きた―」を駿河台キャンパス・アカデミーホールで開催。まもなく九十歳を迎える大塚名誉教授が、考古学者という立場を越え、自らの人生について語る初めての機会とあって、ファンや学生ら約七百人で会場は埋め尽くされた。

●硬式野球部

秋季リーグ三十九回目V、春秋連覇

体育会硬式野球部は十月二十三日、東京六大学野球秋季リーグ・立教大戦を6―2で勝利し、春季リーグに続く二季連続三十九回目的優勝を飾った。春秋連覇は、二〇一三年シーズン以来三年ぶりの快挙。

善波達也監督は「勝つことができて本当に嬉しい。秋は四年生が活躍するのが良い姿」と選手をたたえた。柳裕也主将（政経

4）は優勝の喜びとともに「明大を日本一にして、次のステージに進みたい」と、明治神宮野球大会に向けて意気込みを語った。

●プロ野球ドラフト会議  
四選手がプロの世界へ

プロ野球ドラフト会議が十月二十日、東京都内で行われ、体育会硬式野球部の主将・柳裕也投手（政経4）が中日ドラゴンズから一位指名、星知弥投手（政経4）が東京ヤクルトスワローズから二位指名、佐野恵太選手（商4）が横浜DeNAベイスターズから九位指名、中道勝士捕手（商4）がオリックス・パフローズから育成五位指名を受けた。また、硬式野球部OBでは、糸原健斗選手（JX・ENOS・二〇一五年経営卒）が阪神タイガースから五位指名を受けた。

●競走部 箱根駅伝出場決める  
二位で予選会突破

来年一月二日～三日に開催される第九十三回東京箱根間往復大学駅伝（箱根駅伝）。その出場校を決める予選会（陸上自衛隊立川駐屯地（立川市街地）国営昭和記念公園）が十月十五日、「10」の出場枠を懸けて行われ、明大は二位で九年連続五十九回目の出場を決めた。予選会は、一大学十二人までの選手が二

十キのコースを同時に走り、各大学上位十選手の合計したタイムで順位を競う。明大は、終盤まで江頭賢太郎（商4）、鮫下響大（経営4）らが先頭集団を走るなど、各選手が本来の力を発揮し、箱根への切符を手にした。

●卓球部  
二年ぶり九度目のグランドスラム達成

体育会卓球部は、春季リーグ（五月）、全日本大学総合選手権（七月）に続いて秋季リーグ戦に優勝し、「学生三大大会」を制覇。二〇一四年以来二年ぶり九度目となる「グランドスラム」を達成した。

九月一日～三日に行われた平成二十八年度秋季関東学生卓球リーグ戦（秋季リーグ戦）の優勝決定戦で専修大と対戦。苦しみながらも4―2で下して優勝を決めた。個人賞では、主将の町飛鳥選手（商4）が殊勲賞と優秀選手賞、森蘭政崇選手（政経3）と渡辺裕介選手（商2）が最優秀プレイヤー賞を獲得するなど、それぞれが力を発揮し、優勝に貢献した。

◆駿台トピックス

●歌舞伎「仮名手本忠臣蔵」観劇と懇親会

秋も深まりゆく十一月六日、会員の親睦事業の一環として、総務・事業委員会が企画・運営した「歌舞伎『仮名手本忠臣蔵』観

劇と懇親会」が開催されました。今回は、当会理事・鈴木隆志氏のご尽力により国立劇場（大劇場）の特別席を確保していただき、会員二十二名に加えて多くのご家族・ご親族も参加された賑やかな催しとなりました。

国立劇場は昭和四十一年に開場し、この十一月で万五十年を迎えます。これを記念して義太夫狂言

の大作である『仮名手本忠臣蔵』の全段が上演され、当日は早野勘平役の尾上菊五郎さん、大星由良之助訳の中村吉右衛門さんが出演する第二部で、塩治浪士のその後、その後、取り上げられました。

場所を隣のホテルグランドアーク半蔵門に移しての懇親会では、



七段目「一力茶屋」で遊女おかるを演じた五代目中村雀右衛門さん（今年、芝雀改め襲名）をお迎えして、歌舞伎を楽しむための貴重なお話なども伺い、一緒に写真撮影を行うなど、楽しい一日を過ごすことができました。

### ●第十回オープンゴルフコンペを開催

本年度二回目、第十回目になるオープンゴルフコンペが、十月二十五日、千葉県・千葉バーディクラブで開催されました。残念ながら参加者は少なめでしたが、好天気に恵まれた絶好のゴルフ日和となりました。

優勝は中川敏洋会員（昭和四十七年・経営卒）、準優勝は田村駿会長（昭和四十年・商卒）



で、陶芸家の武内裕会員から寄贈された陶器が副賞として贈呈、第三位は杉浦伸二会員（昭和四十八年・政経卒）、ベストグロスは81で回った高澤徹会員（昭和四十四年・経営卒）でした。

### ◆九月例会出席者

青木幹則、青柳勝榮、秋山隆敬、坪昭二、浅井宏、朝倉晴司、有賀隆治、飯田和人、石井仁、石川かおり、石川均、石橋良一、石原裕司、泉山和久、伊東正博、同ご友人、伊原敏雄、植木榮、上西紘治、宇川一夫、潮田伊佐夫、宇敷和章、同ご友人、大石哲也、大野正美、同ご家族、大前実之、大村託現、岡村勝広、笠井正弘、栢森靖、菊部彰夫、河村博、北野大、清野明男、草木頼幸、古賀慎一郎、小島清治、小濱雅悦、小山修、小山有彦、根田哲雄、根田吉雄、齊藤春夫、齊藤弘之、齋藤柳光、坂田英夫、坂本孝行、桜井保彦、笹田学、佐藤健、佐藤仁、眞田瞳、佐野公哉、杉浦伸二、鈴木紘一、鈴木隆志、瀬戸正道、高澤徹、武内裕、谷原誠、田村駿、常泉邦彦、天童美徳、当山明彦、徳丸平太郎、富水流孝二、中川敏洋、長堀守弘、中村豊、新妻一彦、西澤豊、西山武夫、野口昌宏、橋口隆二、長谷川進一、同ご友人、塙直樹、塙英幸、馬場範夫、平川清、同ご友人、平山英樹、弘中徹、深代尚夫、福田和彦、同ご友人、松崎優子、水江博、宮下隆、向井眞一、村岡健、室井恵明、柳谷孝、山上雅隆、山口政廣、山田朝彦、山田幸夫、同ご友人、湯川孝則、弓野理恵、義江邦夫、吉田均

### 【編集後記】

秋も深まり晩秋となってきた。秋と聞くと、どことなく郷愁にも似た切なさが胸に迫ってくる。移ろいゆくものに対する寂寥感とでもいうのか、旅愁に似たものである。

昨年の大地震の支援にと誘われて、この十月、二十年ぶりにネパールのトレッキングに参加。昔に比べると日本語学校がいくつもできていて、仲間の創設した最古の学校も訪問した。

大半の人がアニメから日本に興味を持ち、将来は日本で働きたいとのこと。いま日本にネパール人が六万人いるというが、訪れる日本人は減少し、中国人が増大している。インフラは遅れ、道路・電気など課題が山積みだが、チベットからの難民二十万人余を受け入れ、各地に難民支援センターが設けられていた。難民には国籍がないため定職に就けず、我々の行く山間部まで行商をしていて、苦勞のほどがうかがえた。

日本での日々の何と幸せなことか。トレッキングを終え、不要品を寄付してきた。四千五百メートルの高地まで人が住むネパール。厳しい冬を迎えるが、難民共々頑張っしてほしい。日本も難民の受け入れを再考する時ではないかと思う。

頑張るといえば、冬のスポーツの華・ラグビーと箱根駅伝である。秋の六大学野球に続き、栄冠を目指して奮進してほしい。駅伝は創設以来の古豪校だ。是非、正月にはラグビーとともに韋駄天ぶりを発揮して活躍してほしい。

（原田 榮）